ねこむかし　山形県

むがし、むがし

あるところに、貧乏なじいさんとばあさんがいました。子どもがなくて、ねこをいっぴき育てていました。

ふたりは、ねこに、タマと名前をつけて、かわいがりました。自分たちが食うや食わずでも、タマには、ちゃんと、じゃこだの魚だのを食べさせました。子ねこのうちは、じいさんがご飯をかんでやわらかくして食べさせました。タマは大きくなると、とてもかしこいねこになりました。人のしゃべることなんか、なんでも分かりました。

やがて、じいさんもばあさんも年をとって働けなくなり、今日食べるお米さえなくなってしまいました。そこで、じいさんは、タマにいいました。

「タマや、タマや。わしらも年をとって、おまえに食べさせてやることもできんようになった。もう養えないから、どこへでも行くといい。ご飯をお腹いっぱい食べさせてくれるお金持ちのうちででも飼ってもらえ。ここにおったらひからびて、死ぬばっかりだからなあ」

じいさんが、涙をぼろぼろこぼしていうと、タマは、

「ニャニャン」と返事して、それっきり、どこかへ行ってしまいました。じいさんとばあさんは、

「タマはどこへ行ったのかなあ。かわいそうなことしたなあ。怒って出て行ったのかなあ」と、泣いてばかりいました。

三日目、どこからか、「ニャオン、ニャオン」と声がしました。

「あらら。タマの声がする。もどってきたんだろうか」といって、ふたりが戸を開けると、そこにタマがいました。タマは、布ぶくろにお米を三升ほど入れて引きずってきていました。

「あらら。こんなにたくさんのお米、どこからもらってきたんだ」

じいさんが聞いても、タマは、「ニャン」と返事するばかりです。

それからというもの、タマは、お米のあるうちは、じいさんとばあさんのそばで、ころころと楽しそうに遊び暮らして、お米がなくなると、また出かけて行って、ふくろいっぱいのお米を引きずってくるようになりました。

「どうやってお米を手にいれるんだろう。まさか盗んだのではあるまいな」
じいさんとばあさんは、あんまりふしぎに思って、ある日のこと、こっそりタマのあとをついていきました。
村はずれまで来ると、タマは、クリッ、クリッとまわって、行者さまになりました。白い衣をまとって、頭を白い布でつつんで、杖をついて、すっかり人間になっています。タマの行者さまは、となり村へ行くと、村人の家の戸口で、ごのごのとお経を唱えました。家の人が出てきて、お米を二合ほど、ふくろに入れてくれました。そうやって、村を一周してくると、ふくろはいっぱいになりました。タマの行者さまは村はずれまでもどって来て、またクリッ、クリッとまわって、ねこになりました。それから、家に帰って行きました。じいさんとばあさんは、
「こんなにして、おらたちのことを助けてくれてたのか」と、泣き泣き、帰って行きました。
あるとき、村の庄屋さんのひとり娘が病気になって、ぽっくり死んでしまいました。そのお葬式のとき、娘さんを入れた棺桶が、はね上がって、天井の梁にぴたっとくっついてしまいました。りっぱな和尚さまたちが五人がかりでおがみましたが、棺桶は下りて来ません。庄屋さんのうちは、上を下への大騒ぎになりました。
そのとき、じいさんとばあさんの家では、タマが、じいさんの前にすわって、こういいました。
「じいちゃん、じいちゃん。これまでたいせつに育ててもらったけれども、これという何ひとつ恩返しできなかった。今こそ、恩を返すときが来た。これからおれがいうことを、よっく聞いてくれ。今、庄屋の家では、娘の棺桶が梁にくっついて、大騒ぎしている。それは、おれがまじないの力でつりあげているのだ。和尚たちが五人がかりでお経を唱えてるから、じきにおれの力もなくなってしまう。棺桶が下りてしまわないうちに早く棺桶の前へ行ってくれ」
「どうやって、部屋に入るんだ」と、じいさんが聞くと、タマは、
「庄屋の家の前で、『うんとありがたいお経を知っているから、おがませてくれ』というんだ。そうして、棺桶の前で、トラヤ、トラヤア、ナムトラヤと、大きな声で三回唱えてくれ。そうしたら、娘の棺桶をおろしてやろう。もうおれのまじないの力もあとわずかで、十本の指の小指しかくっついてないから、早くだぞ」といいました。

じいさんが、急いで行ってみると、庄屋さんのうちでは大騒ぎをしていました。じいさんが、

「なんと気の毒な。ありがたいお経を知っているから、おがませてください」というと、庄屋さんは、畳に頭をつけて助けてくれとたのみました。じいさんは、

「では、ひとつ、このじいが、棺桶をおろしますぞ」といって、

「トラヤ、トラヤア、ナムトラヤ、トラヤ、トラヤア、ナムトラヤ、トラヤ、トラヤア、ナムトラヤ」と、大きな声で唱えました。すると、棺桶が、スーッと下りてきました。庄屋さんは、

「ありがたい、ありがたい。りっぱな和尚たちが、三日も四日もかかってお経をあげても下りない棺桶を、元どおりにしてくださった。お礼をさしあげたいので、なんでもいってください」といいました。じいさんは、

「なんの、なんの。娘さんさえ成仏されればよろしいのです。お礼といって、ほしいものはございません」とことわりました。

庄屋さんは、

「これほどの法力を持った人が、望むものをひとつもいわないなんて、見あげたものだ」と感心しました。そして、それからは毎年、じいさんとばあさんが食べるくらいのお米を運んできてくれました。ふたりは、一生、楽に暮らしました。

タマは、すっとすがたを消しました。ねこは、恩を返すから、たいせつにするものです。

どんべすかんこ、ねっけど

村上郁再話

資料『五分次郎―最上・鮭川の昔話』野村純一・敬子　桜楓社